

Close-up Interview (4月号 表紙の顔)

金子 萌夏

KANEKO MOEKA

「自分本来のボウリングで勝ちたい」

デビュー2年目の現役女子大生プロ・金子萌夏。2年前の高校3年時、プロ入りを前提に地元の栃木ではない神奈川の相模原パークレーンズ(中里則彦社長)が異例の“先物買い”で専属契約を結んだ逸材だ。その期待通り、昨年は石田万音に次ぐ実技2位でプロテストに一発合格し、勇躍プロのアプローチに立った――。



▲好天の3月30日、春らしい装いでロケ撮。ちなみに、オフタイムの楽しみは「大学の友だちとカラオケに行ったり、ボクシングや総合格闘技の試合を生観戦すること」だそう(相模原パークレーンズ近くの公園にて)



▲ボールスピードの速さと回転数が魅力の金子プロ(3月30日撮影/カメラ:馬場高志)

課題は再現性の向上

デビューイヤーは12の公式戦に出場し、7大会で入賞。年間ポイントランキングは26位という成績だった。

「今の自分のレベルで言ったらそんなに悪くはなかったと思いますが、同期が2人(近藤菜帆と石田万音)優勝しているので(苦笑)。それに比べて自分はまだまだ実力不足だな、と」

ひとケタ入賞はレディース新人戦とちゃおちゃおボウリング大会の2回で、いずれも4位。とくに後者はランキングのトッ

プ3(中島瑞葵、坂本かや、石田)と並んでTV決勝まで勝ち進んだもので、優れたポテンシャルの証(あかし)といえるだろう。

「ちゃおちゃおではラウンドロビン中にパーフェクトが出せたのもうれしかったです。あとでプロ協会のホームページにアップされた写真は素の状態で大喜びしていて、自分で見て恥ずかしくなりました(笑)」

ちゃおちゃお大会での好結果を機に、さらに勢いづくかと思われたが、以後は5大会中4大会で予選落ちと、逆に失速して

しまう。「いま考えると、けっこう投げ方が崩れていたと思います。毎回試合の動画を見返すたびに感じるのは、常に同じ投げ方ができていないということ。普段から課題を持って練習しているけれど、試合に行くと知らないうちに悪いクセが出ちゃっている。シーズン後半は試合間隔が詰まっていたこともあって、ズルズル悪い状態を引きずってしまいました」

彼女のボウリングの特長は、自他ともに認めるボールスピードの速さと回転数。前出のトップ3とはほぼ同タイプだが、年間アベレージは現状9~11点の開きがある。

「自分に足りないのは安定感。再現性の向上がいちばんの課題だと思っています。今、投げ方自体はとてもしっかり状態ですが、それを繰り返しできるかといったらできていないので」

今夏には初の海外遠征も

金子は現在、地元短大の2年

生だ。プロ活動と学業の“二刀流”を選択した理由は何なのだろうか。

「英語を学びたくて英語科に通っています。海外の試合にも出たいので、少しでも英語を話せるようになりたいと思って」

その海外遠征が早くも今夏に

実現する。8月に米国ミシガン州のデトロイトで、PWBÅの公式戦3試合に出場することになったのだ。

「宮城鈴菜プロ(42期)に『アメリカに行ったらボウリングの見方が変わるよ』とお誘いいただいて、岩見彩乃プロ(48期)と3人で行ってきます」

目指すは“世界標準”のプロボウラー。初の海外遠征でどんな収穫を得て帰ってくるか、今から楽しみだ。

「たくさん経験を積んで、いずれは“一番”になりたいです。私はけっこう曲げるタイプ。実際の試合では、あえて回転をかけないで曲がりを抑えないと勝てない場面もあったりするけど、自分本来のボウリングで勝ちたい。いま教わっている遠藤誠プロ(47期)にもそう言われています」

今季初戦の関西オープン(2面参照)は8位フィニッシュ。

昨年、同じ会場のボウルアロー松原店で行われた大岡産業レディースでは初の予選落ち(総合41位)をして、戦前は「苦手意識がある」と話していただけに上々の成績といえるが、優勝者がまたしても同期の石田とあっては、気分も複雑だろう。

「万音ちゃんはアマチュア時代から『すごいな』と思って見ていた選手。置いて行かれないように、練習あるのみで頑張ります!」

取材協力: 相模原パークレーンズ/川越ボウリングセンター



かねこ・もえか / 2004年7月5日生まれ、栃木県出身。165センチ、右投げ。23年プロ入り(55期) / ライセンスNo. 600。公認パーフェクト1回。23年度ポイントランキング26位、アベレージ210.34。相模原パークレーンズ所属

金子プロと一緒に投げよう! 近日開催のチャレンジマッチ

- 4月26日 大阪・WAVE34
- 4月27日 大阪・ボウルアロー松原店
- 4月28・29日 大阪・ボウルアロー八尾店
- 5月3日 埼玉・ジョイナスボウル加須
- 5月4日 神奈川・大磯プリンスホテルBC
- 5月5・6日 神奈川・相模原パークレーンズ

WORLD TOPICS 楽しみなアメリカ挑戦 Vol.13 report 山下 知且

USBCマスターズとPBAワールドシリーズに挑戦するため、藤井信人プロ、高田浩規プロ、藤村隆史プロ、そしてこの遠征をサポートして下さるITカンファ(株)の鈴木義経社長とともに、3月21日夕方に成田空港を出発し、現地時間21日正午ごろにロサンゼルス

に到着。空港の入国審査にて、別便で来ていた川添英太プロと奥様にばったり会いましたが、一旦空港で別れ、われわれはロサンゼルスに一泊後、川添プロ夫妻はその足で、それぞれ車でUSBCマスターズの会場であるラスベガスを目指しました。22日、ロサンゼルス

からラスベガスに移動。川添プロ夫妻と再び合流し、ストーム社のロバート・ドン副社長に夕食会(激励会?)を開いていただきました。

23日は会場にて非公式練習。ストームのテクニカルスタッフが予約してくれていたレーンでコーチングを受けながら、1時間ほど汗を流し、その後あちらで用意してくれていた



▲今回一緒に参戦する日本選手らと

ボールをドリルするために、デビッド・ヘインズボウリングサプライ(プロショップ)を訪ねました。オーナーのデビッド・ヘインズ氏は、私が世界選手権に出場していたこ

ろ、チームUSAのエースだったボウラーで、旧知の仲です。

24日は公式練習。ですがその前にスーパードという賞金大会があり、日本人選手全員が参加しました。レーンコンディションはUSBCマスターズのものではなく、過去の世界選手権か何かのパターン。私の成績は4ゲームで848点、賞金まであとわずか40位(日本

人では最上位)でした。

午後になるとレーンコンディションが発表され、いよいよ公式練習が始まりました。今回はA、B、Cの3シフトで行われますが、私だけがAシフトで、あとの4人はBシフト。公式練習もそれぞれのシフトで行われます。少し長めで難易度の非常に高いコンディションでしたが、本戦も頑張りたと思います。その結果については、次号で報告します。



やました・ともかず / 1982年12月5日生まれ、長崎県出身。2000年~2011年ナショナルチーム在籍。2023年6月から長崎県スポーツ協会理事。全日本ボウリング協会理事。2023年4月から長崎県連副理事長。2022年からIBFアスリート委員。



▲PBA所有の巨大なトラック。1台には各メーカーのボール、もう1台にはドリルマシンが搭載されている